

平成22年1月15日

番外 オーラル・ダイレクト・

メソッドという教授法

ハロルド・パーマー イギリス人
正14来日 語学研究所長

大正11年、第1学期の終りころの晴れた暑い日の午後、寺西武夫は、自分が担任をしてきた二年乙組で授業をはじめたばかりのときでした。それは「この前丁度終わった一課を復習の意味で初めから順々に読ませ始めているところだった。急に廊下に大勢の靴音が聞こえてきた。岡倉先生と見慣れぬ外人と数人のお伴とがぞろぞろ入ってくる。私は肝をつぶした。が次々に読ませているうちに段々心も落ち着いてきた。生徒たちはなかなか上手に読む、私もしささか得意になる。読みついたらよい上新教材のOral introductionにはいろいろと度胸を握えている矢先に、一行はまたぞろと出て行ってしまった。私はホツとしたが、同時に幾分残念でもあった。「その時間が済むとパーマーから私達に話があるというので私達は階下の狭い応接室に集まった。当時の附属中学校の英語のスタッフは主任の神保格先生、次は篠田錦策先生、次は東大教授の佐山栄太郎君の岳父であられた佐藤保胤先生という大家揃い、あとはミンツカスのような私と新卒の正木兼君との五人であった。」(寺西武夫著『英語教師の手記』吾妻書房1963より)

これが、後に英語教育で大きな影響を与えるパーマーが附属中学を初めて訪れたときの様子です。

ハロルド・E・パーマーは、1877年、ロンドンに生まれ、若いときに、フランスやベルギーで語学を勉強したり、自ら英語を教えたりしました。その中で、彼は初めて「ベルリッツ・メソッド」という外国語学習法を知りました。それは、ベルリッツというドイツ生まれのアメリカ人によって始められた外国語教授法で、学習者の母語は一切使用しない(ダイレクト・メソッド)、従って教師はその外国語を母語とする者(ネイティブ・スピーカー)に限る、読み書きよりも口頭練習を優先する(オーラル・メソッド)、などの特色をもったものでした。後の、パーマーの「オーラル・メソッド」の種は、この時にまかれたものです。その後、

第1次世界大戦がおこり、イギリスに戻ったパーマーは、ロンドン大学の教師をしていました。そして、ロンドン大学にいたときに、日本への招聘がなされたのです。

ところで、パーマーを日本へ招聘するにあたって尽力したのは、三人の日本人です。それは沢柳政太郎・松方幸次郎・木下正雄です。沢柳は、附属小出身(彼が在学中は未だ附属中学がありませんでした)で、後に東北大・京大総長や附属中学校長なども勤めるとともに、成城学園の創立者にもなりました。彼は、パーマーの招聘に関わっただけでなく、アメリカの個別化教育の源流ともいわれる「ドルトン・プラン」などを実践したヘレン・パークスト女史などの招聘もおこなっており、教育界の大御所と称された人物です。松方幸次郎は、明治の総理大臣松方正義の息子で、川崎重工業の社長でもあったのですが、それ以上に「松方コレクション」で著名で、彼の収集したものとその寄贈で、現在の国立西洋美術館は成り立っているといっても言い過ぎではないと思います。最後の木下正雄は、父親は初代京大総長の木下廣次、本人は附属中学の9回卒で、東大を卒業後、ヨーロッパに留学し、この時は、ロンドン大学で物理学を教えていました。後に、帰国して東大教授も勤めています。この木下の斡旋で、日本の英語教授の改良を考えていた沢柳がロンドンに来たときに、パーマーを紹介され、さらに、日本への渡航費用その他一切を松方が面倒を見ることで、パーマーの日本への招聘が決まったのです。

大正11年、パーマーが神戸に到着した翌日の朝日新聞は次のような記事を載せています。

「英語の博士と諺の博士 連れ立つて来朝す
27日正午神戸入港の郵船蘭丸でハロルド・パーマー及びグンデルの二博士が来朝した。パーマーは文部省から新たに英語発音教授のため招聘され、グ博士は水戸高等学校の独逸語教

授である。パーマー博士は諺の「私は沢柳博士の勧めにより来朝することになった。任期は三箇年で最初は主として各地の高等学校に於ける英語教授法の実態を視察し其概念を得た後長所を活かし短所を補ふ積もりである。根本方針は従来主として文字から教えられた英語を今後は発音から教へる事に努力する。」

東京に着いたパーマーは、小石川の「木下家」の二階に下宿することになりましたが、そこは、ロンドン大学にいた木下正雄の弟の家でした。文部省は彼を英語教授顧問として任命しましたが、給与として400円(当時の東師専教授の主任クラスの給与が、300円くらい)を支払うこととなりましたが、最初の三年間は給与を支払わなかったとも伝えられており、代わりに松方が滞在費として年1万円×3年分、あるいは、全額で5万円を出したともいわれています。

そのような状況の中で、パーマーの日本の英語教育に対する活動が始まりますが、それは、講演であつたり、各地の授業視察でありました。そして、その活動の中から大正12年「英語教授研究所」を創立し、さまざまな英語教育に関する調査や研究を行いました。その成果は、日本の英語教育の発展に大きく寄与することとなりました。最初の予定では3年間の日本滞在でしたが、彼の活動はその後も続けられ、昭和11年まで15年間の活動となり、英国に帰国し、1949年に72歳で亡くなりました。その後、日本ではパーマーの活動を記念する意味でも、1951年「パーマー賞」を設け、国内の英語教育で優れた成果をあげている教師にその賞を与えることとしました。伊村丞道著『パーマーと日本の英語教育』大修館1997 大西雅雄著『パーマー博士と英語教授理論』開拓社1999

